

# 猫吉親方

またの名 長ぐつをはいた猫

ペロー Perrault

青空文庫



むかし、あるところに、三人むすこをもった、粉ひき男こながありました。もともと、びんぼうでしたから、死んだあとで、こどもたちに分けてやる財産ざいさんといつては、粉ひき白をまわす風車ふうしゃと、ろぼと、それから、猫一匹ねこだけしかありませんでした。さていよいよ財産を分けることになりましたが、公証人こうしょうにんや役場の書記しよきを呼ぶではなし、しごくむぞうさに、一ばん上のむすこが、風車ふうしゃをもらい、二ばんめのむすこが、ろぼをもらい、すえのむすこが、猫ねこをもらうことになりました。すえのむすこは、こんなつまらない財産ざいさんを分けてもらったので、すっかりしよげかえってしまいました。

「にいさんたちは、めいめいにもらった財産をいっしょにして働けば、りっぱにくらしていけるのに、ぼくだけはまあ、この猫をたべてしまつて、それからその毛皮で手袋をこしらえると、あとにはもうなんにも、のこりやしない。おなかがへつて、死んでしまっただけだ。」

すえの子は、ふふくそうにこういいました。すると、そばでこれを聞いていた猫は、な

にを考えたのか、ひどくもつたいぶつた、しかつめらしいようすをつくりながら、こんなことをいいました。

「だんな、そんなごしんぱいはなさらなくてもようございますよ。そのかわり、わたしにひとつ袋をこしらえてください。それから、ぬかるみの中でも、ばらやぶの中でも、かけぬけられるように、長ぐつを一そくこしらえてください。そうすれば、わたしが、きつとだんなを、しあわせにしてあげますよ。ねえ、そうなれば、だんなはきつと、わたしを遺<sup>い</sup>産<sup>さん</sup>に分けてもらつたのを、お喜びなさるにちがいありません。」

主人は猫のいうことを、そう、たいしてあてにもしませんでした。けれども、この猫がいつもねずみをとるときに、あと足で梁<sup>はり</sup>にぶらさがつて、小麦粉をかぶつて、死んだふりをしてみせたりして、なかなかずるい、はなれわざをするのを知っていましたから、なにかつごうして、さしあたりのなんぎを、すくつてくれるくふうがあるのかもしれない、とおもつて、とにかく、猫のいうままに、袋と長ぐつをこしらえてやりました。

猫吉親方は、さつそく、その長ぐつをはいて、袋を首にかけました。そして、ふたつの前足で、袋のひもをおさえて、なかなか気取ったかっこうで、兎をたくさん、はなし飼いにしているところへ行きました。そこで、猫は、袋の中にふすまとちしやを入れて、遠くのほうへほうりだしておきました。そこから、袋のひもを長くのばして、そのはしをつかんだままじぶんはこちらに長ながとねころんで、死んだふりをしていました。こうして、まだ世の中のうそを知らない若い兎たちが、なんの気なしに、袋の中のものをたべに、もぐりこんでくるのを待っていました。あんのじよう、もうさつそく、むこう見ずの若い、ばか兎が一びき、その袋の中へとびこみました。猫吉親方は、ここぞと、すかさずひもをしめて、その兎を、なさけようしやもなくころしてしまいました。そうして、それを、えいやつとかついで、鼻たかだかと、王様の御殿へ出かけて、お目どおりをねがいました。猫吉は、王様のご前へ出ると、うやうやしくおじぎをして、

「王様、わたくしは、主人カラバ侯爵からのいいつけで、きよう狩場で取りましたえものの兎を一びき、王様へけん上にあがりました。」

カラバ侯爵というのは、猫吉がいいかげんに、じぶんの主人につけたなまえですが、王様はそんなことはご存じないものですから、

「それは、それは、ありがとう。ご主人に、どうぞよろしく御礼をいっておくれ。」と、おっしゃいました。

猫吉は、ばんじうまくいったわいと、心の中ではおもいながら、

「はいはい、かしこまりました。」と、申しあげて、ぴよこ、ぴよこ、おじぎをして、かえって来ました。

そののちまた、猫吉は、こんどは、麦畠の中にかくれていて、れいの袋をあけて待っていますと、やまどりが二羽かかりました。それを二羽ともそっくりつかまえて、兎とおなじように、王様の所へもって行きました。

それからふた月三月のあいだというもの、しじゅうカラバ侯こうしやく爵しやくのお使だと名のつては、いろいろと狩場かりばのえものを、王様へけん上じょうしました。そしてそのたんびに、猫吉はお金をいただいたり、お酒を飲まされたり、たつぷりおもてなしをうけるうちに、だんだん王様の御殿のようすが分かってきました。

ある日のこと、猫吉は、いつものように狩場のえものをけん上しに行きました。すると話のついでに、きょう、王様が美しいお姫さまをつれて、川へ遊びにお出かけになるということを聞きこみました。そこで、猫吉は、さっそくかえって来て、主人に話しました。

「もしもし、だんなが、わたしのいうとおり、なんでもなされば、あなたは、じきしあわせになりますよ。それもたいしてむづかしいことじゃないんですよ。だんなはただ、きょう、川まで出かけて、わたしのおしえるとおりの所へ行つて、水をあびていればいいんですよ。そうすれば、あとはぼんじ、わたしがいいようにしますからね。」

カラバ侯爵こうしやくは、そう聞いても、なにがなんだか、ちっともわけが分かりませんでしたが、なんでもかでも、猫吉のいうとおりにしました。さて、ちようど猫吉の主人、すなわちカラバ侯爵こうしやくが、水につかっただを洗っているとき、そこへ王様の馬車が通りかかりました。すると、猫吉はきゆうに、火のつくように、かなきり声をあげてさげびたてました。

「助けてください。助けてください。カラバ侯爵こうしやくがおぼれそうです。」

王様は、このさげび声を聞くと、なにごとかとおもつて、馬車の窓から首をお出しになりました、見ると、しきりにどなっているのは、これまでに、たびたび狩場かりばから、いろいろ

ると、けつこうなえものを持ってきてくれた猫なので、王様はおそばの家来けらいに、はやく行って、カラバ侯爵こうしやくをお助け申せ、といいつけました。

家来が、いそいで川へおりて行って、カラバ侯爵こうしやくを引きあげているあいだに、猫吉は王様のところへ出かけて行きました。

「わたくしどもの主人が、川につかって、からだを洗っておりますと、わるものがやって来たのでございます。主人はずいぶん大声で、なんども、どろぼう、どろぼうと申しましたのですが、とうとう、わるものは、着物をぬすんで、もって行ってしまいました。ですから、すぐに着る着物がございません。」

猫吉は、こう王様にうったえました。じつは、その着物は、大きな石の下にかくしておいたのです。けれど、猫のいうことが、さもほんとうらしくきこえるので、王様は、御殿の衣裳いしやうべやのかかりにいいつけて、いちばん上等な着物を、いそいで持って来て、カラバ侯爵こうしやくにお着せ申せ、とおっしゃいました。

王様は、侯爵こうしやくをたいへんていねいにもてなして、ごじぶんの、りっぱな着物を着せました。ところで、猫吉の主人は、生まれつきりっぱなようすの男でしたから、その着物を着ると、いかにも侯爵こうしやくらしい上品なひとがらになりました。それを見た王様のお姫ひめ



さまは、すっかり侯爵こうしゃくがすきになりました。そこで、王様は侯爵こうしゃくにすすめて、馬車に乗せて、いっしょに旅をすることにしました。

猫吉は、じぶんのけいりやくが、うまくあたったので、だいとくいで、馬車よりも先へあるいて行きました。すこし行くと、まきばの草を刈かっているお百姓しやうたちに出あいました。すると猫吉は、

「もうじき王様が馬車に乗ってお通りになるが、そのとき、このまきばはだれのものだ、といっておたずねになったら、これはカラバ侯爵こうしゃくのものだと、おたえしなければいけないぞ。もしそうしなかつたら、それこそ植木鉢うえきばちにはえたちいさな草を引っこ抜くように、おまえたちの首を、引っこ抜いてしまうぞ。」といって、すっかりお百姓しやうたちを、おどしつけました。

王様が、やがてそこを、お通りかかりになりますと、なるほど猫吉のおもったとおり、このまきばは、だれのものだ、とおたずねになりました。けれどお百姓たちは、すっかり猫吉におどかされていましたから、

「わたしどものご主人、カラバ侯爵こうしゃくさまのものでございます。」と、みんな声をそろえて、こたえました。

王様は、うまうまと、だまされておしまいになりました。そして、侯爵にむかつて、まじめにおよろこびをおっしゃいました。

「どうもたいした土地もちでおいでだな。」

そこで侯爵は、すかさず、そのあとについて、

「ごらんのとおり、このまきばからは、まい年、なかなかたくさんな取りいれがございますので。」と申しました。

#### 四

まずこういうやり方で、猫吉親方は、いつも馬車の先に立ってあるいて行つては、麦刈り、草刈りをしている男とみると、おなじようなことをいって、おどしました。

「王様がお通りになつたら、これはみんなカラバ侯爵の畠でございませうというのだ。そういわないと、おまえたちみんな、挽き肉にしてしまうぞ。」

そういつてあるいたあとに、すぐ王様は通りかかつて、麦畠も、牧場もみんなカラバ侯爵のものだときかされました。そのたんびに、王様は、カラバ侯爵が、たいへん

な広い領地りょうちをもつてゐるのに、すっかりびっくりしておしまいになりました、そうしてそのたんびに侯爵こうしやくにむかつて、

「どうもたいしたご財産ざいさんで。」といいました。

このあいだに、猫吉親方は、ひとりさきに、どんどんあるいて行って、とうとう人くい鬼が住んでゐる、りっぱなお城へ来ました。この人くい鬼は、世にもすばらしい大金持で、王様が、みちみち通つておいでになつた、カラバ侯爵こうしやくのものだという広大な領地りょうちも、じつはみんな人くい鬼のものでした。猫吉は、この人くい鬼のことをよく聞いて知つていましたから、そのとき、ずんずんお城の中へはいつて行って、

「ご近所きんじよを通りかかりましたのに、あなた様のごきげんもうかがわずに、だまつて通る法ほうはございませんので、おじやまにありがとうございました。」と、さも心から、うやまつているように申しました。

それを聞いた人くい鬼は、すっかり喜んで、人くい鬼そうおうなれいぎで、猫吉をもてなしました。

さて、ゆつくり休ませてもらつたところで、猫吉は、おそろおそろ、

「あなた様は、ごじぶんでなろうとおもえば、どんなけもののがたにもおなりになれる

のだそうでございますが、それでは、ししとかぞうとかいったような、あんな大きなものにもおなりになれるのでございますか。」と、たずねました。

すると、人くい鬼は、早口に、

「なれなくつてき。なれなくつてき。よしよし、うそでないしようにここに、ひとつ、ししになつて見せてやろう。」

こういつて、いきなりししになつてしまいました。猫はすぐ鼻のさきのきに、大きなししがふいにあらわれたので、あわてて、長ぐつのまま、あぶないもこわいもなく、軒のかけひの上にかけてあげりました。しばらくたつて人くい鬼が、やっと、もどおりのすがたになつたのを見すまして、猫吉はそろそろ、かけひからおりて来ました。

「どうも、じつに、おどろきました。わたくしは、今にもひとつかみになさるかと思つて、ぶるぶるふるえていたのでございますよ。ところで、これも人から聞きました話で、あてにはなりません、あなたはまた、ずっと小さなけもの、たとえばねずみなら、はつかねずみのような小ねずみなんかにも、なるうとおもえばおなりになれるということですが、まさかねえ、こればかりは、とても信じられません。」

こういつて、猫は、うたがいぶかいような目をしました。

「なに、信じられん。」と、人くい鬼はおこつてさげびました。「よしよし、すぐ小ねずみになつて見せよう。」

人くい鬼は、いうまに、一ぴきのはつかねずみにかわつてしまいました。そして、ちよろ、ちよろ、床ゆかの上をかけまわりました。猫吉はしめたというなり、すばやく、小ねずみにとびかかるが早いか、あたまから、むしやむしやと、たべてしまいました。

## 五

そのとき、お城のそとのつり橋を、王様の馬車のわたつてくる音がきこえました。猫吉は、その音を聞きつけると、さつそく、お城の門のところへ出て行って、王様にこう申しました。

「さあ、どうぞ、王様には、カラバこうしやく侯爵のお城におはいりくださいますよう。」

王様は、さつきからこのお城に気がついていました。そして、だれのお城だか知らないが、中はさぞかしりっぱだろうから、はいつてみたいものだど、おおもいになつていたところでした。ですから、猫吉がそういうのを聞くと、ますますおどろいておしまいになり

ました。

「なに、これも 侯爵のお城。いやどうも、お庭といい、建物といい、こんなりっぱなお城は見たことがないわい。では、拝見しよう。どうぞ案内をたのみますぞ。」

王様が馬車からおりると、猫吉は、そのあとからついて行きました。カラバ侯爵はお姫さまに手をかして、そのあとにつづきました。やがて大広間にはいると、おかざりしたテーブルの上に、りっぱなごちそうがならんでいました。じつは、このごちそうは、きょう、たずねて来るはずの友だちのために、人くい鬼がしたくしておいたものでした。けれども猫吉は、それがわざわざ、王様やお姫さまのために用意させてあったもののように見せかけました。人くい鬼の友だちも、王様がおいでときいて、えんりよして、かえって行きました。

やがて、みんなはテーブルについて、ごちそうをたべました。王様は、お姫さまどうよう、侯爵のりっぱなひとがらに、すっかりほれこんでおしまいになりました。そのうえ、侯爵が、たいへんお金持なのを知って、なおなお、このもしくおもいました。そこで、五六ばい、さかずきをあげてから、王様は、

「どうぞでしょう、侯爵、おいやでなかつたら、姫と結婚してくださいませんか。あ

あなたは、わたしどもにとつては、申しぶんのない方です。」と、いいました。

侯爵こうしやくはそのとき、うやうやしく敬礼けいれいしたのち、王様の申し出された名誉めいよを、よろこんで、お受けすることにしました。そうしてその日、さつそくお姫さまと結婚しました。さて、猫吉は、大貴族だいきぞくにとり立てられました。それからもう、やたらにねずみを取ったりしないで、気らくに、その日その日をおくりました、と、さ。

親ゆずりの財産ざいさんに、ぬくぬくあたたまっているよりも、若いものは、自分の智慧ちえと、うでを、もとでにするにかぎります。





## 青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店

1950（昭和25）年5月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 猫吉親方

またの名 長ぐつをはいた猫

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 ペロー Perrault

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>